パネルディスカッション
「アジア仏教の現在」

ファシリテーター：若原雄昭［龍谷大学理工学部教授］

パネリスト：李　学竹［中国蔵学研究中心宗教研究所副研究員・龍谷大学仏教文化研究所客員研究員］

林　韻柔［台湾東海大学歴史学系兼任助理教授・龍谷大学仏教文化研究所客員研究員］

黄　維忠［中国蔵学研究中心『中国蔵学』編集部副編審・龍谷大学仏教文化研究所客員研究員］

佐藤智水［龍谷大学文学部特任教授］

木田知生［龍谷大学アジア仏教文化研究センター・副センター長、龍谷大学文学部教授］

二谷真澄［龍谷大学国際文化学部准教授］

長谷川: それでは第2部といたしまして、パネルディスカッション「アジア仏教の現在」を開催させていただきます。

このパネルディスカッションでは、ファシリテーターとして若原雄昭先生（本学理工学部教授）にファシリテーターをお務めいただきまして、先ほどご報告の3人の先生と佐藤智水先生、木田知生先生、三谷真澄先生に入っていただき、「アジア仏教の現在」と題しましてディスカッションをしていきます。

そうしましたら、ここからは若原先生にお任せいたしますので、若原先生、どうぞよろしくお願いいたします。

若原: はい。どうも、今ご紹介いただきました若原でございます。そうしましたら、早速ですが、先ず私どものこのアジア仏教文化研究センターの研究メンバー、研究分担者であります佐藤智水先生、木田知生先生、三谷真澄先生、お三方に順に、それぞれ李学竹先生、林韻柔先生、黄維忠先生のご発表に対しましてコメントを頂戴して参りたいと思います。

始めに佐藤智水先生に、最初の李学竹先生のご報告に対するコメントを頂戴したいと思います。

佐藤: ご紹介いただきました佐藤です。私は中国の仏教史をテーマとしておりますが、中国仏教の現状、とりわけ江南仏教と言いますか、南方の中国仏教については、誠に疎いのであります。しかし、本日、李先生には特に福建仏教を素材にお話しいただいたのですが、非常に感心いたしましたのは、福建地方を切り口にされながらも、しかし、その伺った話はまさに中国仏教の抱えている課題をいろいろなところで示唆していただいており、また、大きな見方と同時に微細な点の紹介もありまして、多くの新しい知見をいただきました。非常に感謝しております。また黄先生は、四川省や青海省などの地域で展開中のチベット仏教の現状をもお話いただいたのですが、中国仏教の現状は極めて多様であること、そして地域的に非常に変化に富んでいるということを教えていただきました。ありがとうございました。

私なりの理解をまとめますと、現在の中国では、中央政府が仏教協会と協力しながら、正しいと認める仏教をできるだけ整然と各地の実情に応じて展開しよう、という基本的な姿勢が伺えるのではないかと思いました。その評価については、いろいろあってよいと思いますが、大枠の実情を知ることができたのは大いに有意義でした。また一方で、各地域では、その地域の伝統に基づく仏教への関心が、鬱勃として今起こりつつあるという気がしました。

私は少しばかり中国訪問の経験がありますが、30年前の訪問で中国の学生達といろいろ意見交換した時に、仏教に興味を持つ学生はほとんどいなかったことを覚えています。宗教というものは、要するに迷信だという感覚でした。

ところが何回か訪れるうちに、学生の中にも興味を示す人が少し出て来たように感じます。また各地を巡っていますと、今まで見なかった所にお坊さんがいたりする、或いは尼さんがいたりします。話を聞いてみると、熱意を込めて仏教の意義を語る僧や尼僧に出会います。5年前のことですが、山西省のある尼さんは銀行に勤めていたそうですが、毎日毎日人の金ばかり扱っているのが嫌になり、それで、もっと自分には自分らしい生き方があるんじゃないかと思ってここに辿り着いたんだと、非常に生き生きと自己表現をされているのを聞いて、中国も随分変化しているのなという感じを受けました。

ですから、中国仏教をこれまでの固定観念で見ることは、実情にそぐわないと感じております。私は、中国仏教はここ百年ばかりずっと眠ってきたんだと、いろいろな所で話をしてきましたけれど、いや、眠っているのではなくて、もう起き上がりつつあるんだということを強く感じました。

次に、私が今日学んだことは、中国の近代・現代の仏教を理解するためには、高僧と言われる弘一とか大虚とか圓瑛とか虚雲という高僧達が、どういう提言をし、どういう仏教を広めようとしたのかということを踏まえないと、中国の近現代の仏教の理解に到達しないということです。勉強不足の私としては大きな示唆をいただきました。これから勉強しようと思ったところです。

ところで、台湾仏教のお話を伺った時、或いは先日アメリカ仏教の現状というのをお伺いした時に、世界の仏教の方向と言うか、ある種の模索というのは、一言で言うと「エンゲイジド・ブディズム」の方向を目指していると感じます。すなわち「社会に関わる仏教」と言うか、「社会に発信する仏教」、或いは少し言い過ぎかもしれませんが、「目覚めた社会を目指す仏教」とか、そういう方向が各地で模索されていると思います。例えば、台湾仏教の場合は、自然環境を大切にするというような環境保護運動も仏教教団が率先して関わりつつあるというお話を伺いました。

その点、中国仏教の現状はどうだろうと思いました。具体的な社会への関わり方という点で、一つ私が思いましたのは、李先生のお話の中で、界詮法師（1959－）が「律こそが一番大事なんだ」と、「仏教で一番大切なものは律だ」というふうにおっしゃっている。李先生のレジュメを拝見しますと、「戒律が仏教の命であり、特に激しく変化する現代にこそ、戒律が必要であり、厳しく戒律を守れば、社会の濁流に流されることはないと考えた」という発言が示されています。これは、人間としてあるべき正しい道を守ることこそが大切である、ということですが、李先生の最後のまとめのところに、経済が発展している一方で、社会矛盾・社会問題がいろいろなところで噴出しているとあります。そこでの「律こそが大切なんだ」という主張、それこそがやはり社会への問題発信ではないでしょうか。現実の社会がそうではないからこそ、人間としてあるべき道を示そう、というメッセージを含んでいると受け止めるべきではないでしょうか。その意味で、仏教の道を指し示し

ながら、実は社会に対して正しい生き方のメッセージを送るという姿勢が、現代の中国仏教に伏流している。その点で、中国仏教もやはりエンゲイジド・ブディズムの芽を内包しているのではないか、という感じを受けました。

そこで、たくさん質問があるのですが、二つお尋ねしたいことがあります。一つは、私は中国に行って、少し不思議だなと感じたのは、居士、居士林という、黒い衣を着た、坊さんではないけれども在家信徒の方で、寺院や仏教協会を支えておられる方がたくさんいらっしゃる。それは宗派とは特に関わりがないように思うのですが、日本にはこの居士とか居士集団というようなグループはありませんよね。その点について、李先生に、居士達はどういう繋がりを持って、仏教に対してどういう支援の仕方をしようとしているのかを教えていただきたいと思いました。

それからもう一つ、界詮法師が「律こそが大事なんだ」とおっしゃる場合、そして界詮法師が律の講義をいつもされていると言うのですが、この場合、律の経典はたくさんありますけれども、どういう律を最も中心に据えて教えておられるのかをお尋ねしたいと思います。よろしくお願い致します。

若原： それでは李学竹先生の方から、只今の佐藤智水先生からのコメント、またご質問も2点出ておりましたけれども、お答えいただけたらと思います。

李： ご質問ありがとうございます。先ず第1点ですね。居士林というのは、これは、恐らく1930年代、いや、もうちょっと前から、中国の上海で始まったと思います。当時、近代中国の有名な仏教者、印光法師や圓瑛法師らが上海で活躍していたので、その周りにたくさんの知識人の信者が集まって仏教を勉強、研究しているんですね。その後は、信者同士らは居士林という団体を作り、仏教を研究しながら布教もしていたそうです。

その後、中国の近代仏教を中興した楊文会という人が“居士仏教”という概念を言い出しました。楊文会という人は、日本の南条文雄先生と親交があった人で、彼は南条先生を通じて日本からたくさん、中国で失われた書物、例えば『中論疏』『百論疏』『成唯識論述記』などを日本から輸入し、そして彼は南京に金陵刻経処というところを作り、出版していたのです。また、楊文会居士は支那内学院という居士を中心とする仏教学校も創設しました。そこで勉強するのはほとんど在家の居士です。有名な居士には欧陽漸、呂秋逸などがいます。もちろん、そこで勉強する僧もいるのです。例えば、近代革命和尚といわれる太虚大師もそこで勉強していたのです。だから、楊文会居士は中国では非常に影響力のある居士です。

このように近代、有名な仏教学者の居士が活躍することで、中国の居士仏教が広まったのです。全国各地で居士林の組織が作られました。

現代における中国の有名な居士と言えば、故中国仏教協会会長、趙朴初居

士です。彼は、居士ということに　こういうような定義を与えていました。家に住んでいる、仏教を学んでいる人は居士だと。士は人という意味ですが、そういう定義を与えたのです。

仏教協会という団体が僧侶を中心とするのに対して、居士林は在家信者の組織です。今、居士の資格というか、基本的には、三帰依の儀式を受けた信者は居士と見なされます。居士林の組織はほとんど自発的に組織して、多くはお寺の事務所を借りて、居士を集めて活動します。経済のよい地方では、立派な建物を建てた居士林もあります。

近代では、知識人、学者というような居士が多いのに対して、今の居士はほとんど退職後のおばあさんとかおじいさんが多いです。定年後、仏教の信者になる人が多いからです。また、昔の居士は、主に仏教を研究する活動が多かったのですが、現在の居士は、お寺の法会や行事のボランティアをやっていることが多いです。さきに紹介しましたような『福慧の旅』に、毎回100人ぐらいの居士がボランティアで手伝って来ています。こういうような居士らが中国仏教やお寺を支えているのです。

第2点は戒律ですね。戒と律は違うのです。戒は禁じられるもの。律は守っていくようなルールです。これを分けていると思います。界詮法師のところは戒律ですが、普段守っている布薩というのがあって、布薩は月に2回、15日と29日か30日に分かれています。白月と黒月と言うのですが。その布薩の時に戒本を読み上げる。これは主に比丘戒です。四分戒律、四分律の戒本ですね。それを読み上げて、この半月間は自分がどんな戒律を犯したかというような、自分の行為を点検していくという感じです。それで律というのは、生活のルール、それは私も昔学んだ沙弥律という、例えば手を洗う時はどんな呪文を唱えるか、椅子に座る時に先ず叩くんですよ。なぜ叩くかと言うと、この椅子の中に小さな虫が入っているから。叩いて逃げるように、つまり不殺生の戒を守るためです。そういういろいろ律の、細かい規則が書いてある。だから昔のように、律の生活に則って生活しましょうと、これを実践しているのです。

佐藤：　四分律ですね。

李：　四分律です。南山律と言う、道宣律です。中国では今どこでも南山大師道宣が作った律に従い、受戒が行われます。

若原：　佐藤先生、よろしいでしょうか。そうしましたら、次に木田先生の方から、林韻柔先生のご報告に対するコメントを頂戴したいと思います。

木田： 先ほど、林先生から台湾仏教の現状についてということで、五大道場を中心にお話をいただきました。私はお寺出身ではありませんので、仏教についてはあまり詳しくなかったのですが、この大学に勤めましてから、いろいろな機会、中国、或いは台湾の仏教界の方々と接触する機会がございました。かつて北京にございます仏教協会にも何回か足を運んだことがございますし、実はまた台湾ではなく、中国の揚州でございましたが、そこで先ほどからお話のありました仏光山、仏教五大道場のうちの一つですね、仏光山の方々が開いた会に参加して、親しくそちらの星雲法師を始め、居士様方と交流した経験がございます。ですから、今日のお話はいろいろな意味で大変興味深く拝聴いたしました。

今日はお手元の林先生の発言要旨をもう一度辿っていただきますと、最初に台湾仏教の伝承系統ということで、仏教がその他の宗教の中でどういう位置を占めているかというようなお話がございました。これはやはり最初に押さえておかなければいけないポイントでございましたが、それについて明確な数値をお示しいただきました。

その後、今日のご報告の多分中心的な問題でございましたが、台湾の仏教の五大道場およびその他ということで、それぞれお話をいただきました。これは詳しくお話をいただきまして、これについて初めて具体的な情報を得たという方は私を含めて多くおられるのではないかと思っております。

最後に、現在の台湾仏教の特徴につきまして、1から6までおまとめいただきました。その中でも特に尼僧の重要な役割ということについて具体的なお話もございました。また4番目には政治との関わりですね、これについて特に強調されておられまして、最後に「人間仏教」という形で台湾仏教の特色をまとめておられました。且つ、最後には、今、隆盛を迎えておりますけれども、台湾仏教の中にどのような問題点がまだ残っているのかと、或いはこれから大きな問題となるのかというようなことでご指摘をいただきました。

いずれにしましても、今日の重要な話題でございました五大道場というのは、お話を伺っている限り、そしてまた私の理解している限り、台湾の戒厳令が終った後、1987年以降に隆盛へと向かい、そして今、多分その隆盛を極めている状況だと思うのですが、25年ほどの時間でございますね。ですからこの変化は、要するに我々の目の前で起こっていたのですが、実際のところ、日本におりまして、そのことを実感しにくい状況がございますが、今日のお話の中で、必ずしも我々はそれを別な地域の、別な動きだと思わなくて、新たに吸収できる点、これは吸収できるのではないかというようなヒントを多々頂戴いたしました。

私自身も、先達て以来、林先生とお話をして、10或いは20といった質問をお尋ねしておりましたし、今日も新たにお持ちした質問等も多々ございますが、私の質問はまた別の機会に私自身がお尋ねできることでもございますの

で、皆様の方から頂戴した質問票、5名の方々から5つを超える幾つかの問題を挙げていただいておりますので、先ず最初に、質問票の中から質問を幾つかさせていただいて、私のまとめと、一つの質問のきっかけということにさせていただきたいと思います。

幾つかありました質問票の中で、お二方が尼僧について大変強い関心を持っておられます。特に仏光山に行かれた方からのご意見、質問でございますが、その中に非常にたくさんの尼僧がおられたということで、それについてのお尋ねでございます。男性と違って、女性が多いということについてのご質問であります。また、もう一方からは、比丘尼、尼僧の僧団が独立して存在しているのかというようなお尋ねもございました。先ず、この尼僧ということに限ってお尋ねをいたしたいと思います。いかがでございましょうか。お願いいたします。

若原: では、今の最初のご質問について少しコメントをいただけますか。

林（通訳）: 台湾の発展における比丘尼の重要な役割に関して関心を持たれる方は多いですが、台湾においてもこの比丘尼が多い状況に驚いており、これまでたくさんの研究がございます。ご指摘下さったように、中国社会文化における男性が家を継いでいかなければいけないという観念と女性の比丘尼が多いということは確かに関係があります。これは、なぜ比丘尼が多いかということに対するある程度の答えとなります。これ以外にも当然別の理由があります。一つは、梵行清信女というのと、台湾にもともと存在する「斎姑」というものと関係があります。「斎姑」と梵行清信女とは、ともに中国の明清時代の南方に流行した「斎教」が起源です。それは女性が家庭から離れる時に一つの選択肢を与えるものでありました。元々、清朝時代の台湾の女性にも家庭を離れ斎堂に入り「斎姑」になる人が多くいました。福建では1980年以後、多くの梵行清信女が正式に剃髪し比丘尼となる者がでてきたことと同様に、台湾では政府が仏教界の戒律の伝授に強く介入するという状況下において、斎姑たちが1950年以降に正式に比丘尼として出家するようになりました。元々「斎姑」ですから、仏教に接触する機会が多く、それが徐々に比丘尼に変わっていきました。1970年以降、これとは別の、全く違った発展があります。新しい状況というのは高学歴の高等教育を受けた女性が家庭に入って子育てなどの家事をするのを嫌がって、さらに勉強をしたいということで出家するということです。地位のある女性の選択肢の一つとして比丘尼というのがあります。比丘尼は教団の中で、現在、比丘尼の学歴は他の人より高いということがはっきりとわかります。そのことは、女性が社会的な地位を得ようとする意識を持ち始めたことと深く関係しています。

当然、台湾にも独立した比丘尼の僧団、僧院というものはあります。最も

有名なのは香光尼団です。比丘尼の僧団は皆、大学、専門学校以上の学歴を持っている人達です。この人達は学術の進歩にも貢献しています。

もう一つ別に、地方の小寺院にも比丘尼が住職のところが過半を占めます。五大道場においても、比丘尼の数が比丘よりもはるかに多いです。当然、比丘尼だけで比丘がいないというところもあります。興味深いのは、男と女の僧侶がいる中で、もし女性の方が優秀であったとしても住職にはなれません。佛光山、法鼓山、中台山、霊鷲山ではそういった状況が見られます。

木田: 他にもお尋ねしたいことがございますけれども、これで一旦、三谷先生の方にマイクをお渡しします。

若原: それでは引き続きまして、三谷真澄先生より黄維忠先生のご報告に対してコメント、ご質問、お願いいたします。

三谷: 今回は、黄維忠先生より四川省を中心とした中国のチベット仏教の現状についてご報告いただきました。私自身も知らないことが多く、大変ありがとうございました。

今回、お話された内容を見ますと、塔爾（タール）寺はゲルク派の寺院ですが、どれほどの活仏がいらっしゃるか云々ということに言及されたにとどまり、詳しくご報告されたのは昌列寺、亜青（ヤチェン）寺という寺院のことでありました。

昌列寺は、豪華絢爛な、非常に新しい意匠のチベット仏教寺院として紹介され、亜青寺の方は、非常にたくさんの信者を擁する寺院の代表としてご紹介されたわけです。この昌列寺と亜青寺は、どちらもニンマ派の寺院であるという共通性があります。ご承知のように、ニンマ派というのは古派という意味です。チベット仏教の歴史を前伝期と後伝期に分けますと、初期の7世紀から9世紀までの前伝期に翻訳された古訳タントラを拠り処とする一派がニンマ派です。一方、10世紀以降の後伝記の新訳タントラに依り、いわゆるチベット大蔵経を集大成したのがサルマ派です。例えばゲルク派とかサキャ派とか、そういう諸宗をまとめて新派＝サルマ派と言います。ですから、チベット仏教と一概に申しましても、ニンマ派（古派）とサルマ派（新派）というのは随分様相が違いますので、この点に注意が必要だと思います。

今回のご発表の中で、2008年に「中国蔵学研究中心」でアンケートを取られたというお話しがありました。先ほど黄先生に「これは出版する予定があるのですか」とお聞きしますと、「内部資料だから出版する予定はない」ということでありました。大変貴重なデータを今回、龍谷大学の国内シンポジウムのために披露していただいたことに対し、感謝をさせていただきたいと思うことであります。

このアンケートでは、全体で13万人の男性・女性の僧侶がおられる中で、8000通のアンケートを送られ、5000近いアンケート結果が返ってきたとのことです。その中で、民族構成や教育レベル、年齢層などを中心としてご発表されたわけであります。先ほど出版をされないということでありましたけれども、できれば様々なアンケート項目があったかと思いますので、何らかの形でお知らせいただければという希望を持っております。

それから、ご発表の中で、寺院の特徴として両極化ということが挙げられておりました。僧尼数が多いところと没落していく寺院、それから信者数の多いところとそうでない寺院があると。これは日本の場合でも同様だと思うのですけれども、それを生み出す幾つかの原因があるということを分析されておられました。その中で、数々の信者からいただく浄財やお布施が大事なものになってくるわけです。大変素晴らしい有名なお坊さんがいらっしゃるとか、あるいは活動が大変盛んであるとか、あるいはたくさんの信者がおられることによって、また、それがまた更に信者を増やすということになるのかもしれませんが、その取組が大変注目されて信者数が増加していくということもあろうかと思います。その中で、今回お話をされた昌列寺と亜青寺は、ともにニンマ派なのですけれども、このニンマ派で特に信徒が増加している、あるいは若い方々が信仰を持って参加しておられるということを、中国青海省の中の一つの事象としてご報告をされたわけです。日本の場合ですと、仏教に関心を持つ若年層が増えるということが昨今は大変難しくなっております。もちろん龍谷大学も仏教系大学で、18歳から「仏教の思想」の講義をしております。私も、この授業を担当しているのですけれども、なかなか若い方が仏教に関心を持つことが難しいという時代の中で、どういう面が若い人達を惹き付けているのかということに深く関心を持った次第です。

そこで、私から3つほどご質問をさせていただきたいと思っております。一つは、ニンマ派の寺院が「漢地」から多くの寄付を集めているという点についてです。中国の「漢地」、要するにチベット族ではなくて漢民族の土地という意味だと思いますが、そこで多くの信者、特に若年層の信者を獲得し、たくさんの寄付をしていらっしゃる。ニンマ派の寺院がそのような現状を持っているのはどういうことなのだろうか。もし、そのことについて何か知見がございましたらお教えいただきたいと思います。あるいは、先ほどの昌列寺や亜青寺だけの特殊な例なのか、ニンマ派全体の一つの特徴なのかということを含めてお願いいたします。

2番目は、先ほど佐藤先生からエンゲイジド・ブディズムのお話が出されたことと関連いたします。このBARCでも新しい研究を続けている最中なのですが、特に今回お話をされました寺院に限定していただいて結構だと思うのですが、出家者と在家者との関係、あるいは社会との関係というものはどのようになっておりますでしょうか。亜青寺には、6000人から7000人の覚姆（チ

ョモ）、それから3000人の扎把（タパ）がいるということをおっしゃいましたが、このお坊さんの資格というものは社会との関係の中でどのように認められているのかということもお聞きしたいと思います。

それから3番目は、これはあまりお話しされた内容とは関わりないのですけれども、寺院の様式についてです。世界各地から建築材料を取り寄せ種々様々に立派な意匠を施した寺院のことを紹介されましたが、その寺院様式については、どのように捉えたら良いのだろうかということです。ニンマ派は、禅宗と密教との融合といわれるような、教義上の特性もあるわけですけれども、場合によると、そういった教義が、こうした寺院の意匠に関わりがあるのかどうかをお聞きしたいと思います。

フロアからの質問につきましては、後ほど若原先生の方にお返しいたしまして、お聞きしていただければと思います。以上でございます。

若原: それでは、黄先生の方から今の三谷先生のご意見、ご質問について。

黄（通訳）: 一つ一つ触れていきます。今、チベットの信者が多いことと若年化ということは、チベット仏教のすべての宗派の共通の特徴であります。この特徴はニンマ派に限られていません。さきほどの、林先生の報告の中にもあるように、お寺が発展しているのはほとんどその住職がカリスマ的存在で、信者達を惹き付けているように思います。それが第一の問題です。

第2、次の問題は出家者と信者の関係ですね。この関係も二種類ほど見ることができます。一つは、たまに法事がある時に、住職を訪ねる信者がいます。もう一つは、住職と関係が非常に密接であるような信者です。つまり、住職に帰依した信者ですね。こういうような信者がずっとその住職の傍にいます。例えば、特にこの信者は漢族の人の信者がこのような場合が多いのです。その住職について内陸に行って世話するなどします。だから、北京とか上海とかに行って活動をする、手伝いをするのです、その信者は、それから、信者がそのお寺に行き、短期間滞在して、集中的に一遍に行をしたりとかします。

僧侶の資格のことなのですが、チベット仏教の中の宗派ですね、やはり僧尼の資格の認可はやはり厳しいです。先ず寺院に入りたい人が自分から申請しないといけないのです。また、お寺の中に知り合いの人を、自分の師匠としないといけないです。最初にこの師匠が弟子にお寺のしきたりとか、いろいろ教えないといけないのです。一定期間を経て、それから徐々に勉強するような教科を渡します。相対的に、ニンマ派は僧侶の資格を認めるのはあまり厳しくないです。だから、今日の報告の中にもニンマ派の僧侶の人数がたくさん増えたことを報告しましたですが、それも原因があるんですね。入るのが厳しくないから、誰でも入れるようになっています。特に尼僧の場合、他のゲルク派とか他の宗派は尼僧をあまり入れません。入れても非常に厳し

いです。ニンマ派はそれほど厳しくないです。
　次、第3の問題ですね。先ず、寺院の様式のこと、現状のことなのですが、チベットの仏教寺院の建築の風格は当初よりいろいろな要素を取り入れています。例えば、チベットにおける最初の寺、サムエ寺ですね。この寺は、その時、チベットとインド、中国の3つの様式を取り入れたので、三様式の寺と言われることもあります。だから、その後、仏教に、発展に従っていくと、チベットでは、中国内陸から建築様式をたくさん取り入れています。青海とか四川とか、甘粛などのチベット寺院では、こういう漢・蔵が融合した様式はたくさん存在しています。
　以上です。ありがとうございます。

若原:　三谷先生、よろしいでしょうか。

三谷:　はい。

若原:　先ほど木田先生の方から、会場、フロアからの質問をご紹介されておりまして、木田先生ご自身のご関心からの質問、コメントを頂戴しておりません。しばらく時間の余裕がございますので、木田先生にその点をちょっとお願いしたいと思います。

木田:　はい。実は幾つもあるのですが、会場に来られている皆さんと共通の興味かどうかわかりませんが、用意していただいているレジュメの後ろの方にインターネット媒体について書いてあるところがございます。おそらくこの五大道場と言われているものの近25年のこの布教活動の交流は、新しいこうした布教媒体と言いますか、電子媒体が非常に大きな影響力を発揮していると思います。今日、ご講演の中ではコメントはございませんでしたが、仏教経典のデジタルデータベース、これも幾つかの協会が熱心に取り組んでいまして、実はその影響をどの研究者も受けていると思われます。ですので、先ず幾つかお聞きしたいことはございますが、その1点だけに絞ってお尋ねいたします。五大道場と電子媒体、電子メディアですね、それとの関係についてお示しいただければと思います。よろしくお願いいたします。

林（通訳）:　台湾の五大道場のうち、最も早く現代の電子媒体を使って布教活動を行ったのは仏光山です。佛光山では戒厳令解除以前に早くも放送局において電子媒体を使った専属の番組を持っていました。戒厳令解除後、最初に独立したテレビ局を開いたのは慈済基金会の大愛電視台です。そのテレビには、当然、証厳法師の法話もあるんですけれども、他にも仏教や文化、現代社会などのいろいろな番組があります。特にシリーズものの外来番組を作

っております。それによって多くの人に慈済基金会の精神や理念を容易に理解させることができます。

次に出来たのは、仏光山の「人間衛視」(衛星テレビ)というものです。このテレビは法師が仏典の講義をするというもので、仏法の意義を伝えることと直接的な関係があります。この他、小さな道場が共同で出資し作ったテレビ局も二つあります。24時間ほとんど絶え間なく法師の法話の番組を流しているということです。これはテレビ、電子媒体を使った部分ですね。

インターネットの方は学術的なものと比較的密接に関係しております。最も重要なのはもちろん、法鼓山です。現在、世界中の中国仏教研究者が使っているCBETAというのは法鼓山と中華電子仏典協会が合同で開発したものです。もちろん電子仏典は仏教研究に大きな影響を与えました。そのため法鼓山というのは、仏教研究の学術界と関係を有しております。仏教学の学術界における法鼓山の重要性はおそらく遥かに他の道場を超えております。法鼓仏教学院の中の研究所には、仏教資訊処というものがあります。そこでは、大学院生と先生が一緒になって、仏典や関係資料のデジタル化の作業をしております。そのために台湾の仏教研究の学術界と共同で、多くの資料庫を作っております。レジュメにあります台湾仏教史料庫、台湾佛教數位博物館、仏学数位図書館暨博物館、玄奘西域行などは法鼓山と他の機関が共同で制作した成果です。法鼓山はデジタル化やインターネットによって仏教の普及や資料の保存という面で非常に重要な貢献をしております。

もう一つ重要なものがあります。「仏教網絡論檀」という掲示板みたいなものです。その「論檀」のところでは敬虔な仏教徒によって仏学の問題が提起され、それに関して討論が行われております。その中で非常に多くの論争があります。皆さん興味がお有りでしたら、法鼓山のウェブサイト、仏学院のウェブサイトでご覧ください。そういう仏教の史料、文化のデジタル資料化という面で法鼓山というのは最も重要なところであると思います。当然、五大道場の中で他のところもホームページなどは充実しております。ありがとうございました。

若原: ありがとうございました。それでは、残り時間もそろそろ限られて参りましたので、フロアの方から頂戴しておりますご質問を時間の許す限りご紹介をして、発表者の先生方からお答えをいただきたいと思います。

先ず、最初の李学竹先生のご報告に対して2点の質問をご紹介したいと思います。一つはご発表の中で1980年代の三大模範叢林ということに触れられまして、広化寺というものをご紹介になっておりますが、その他の2つはどういうお寺でしょうかということですけど。

李: もう2つの寺は江蘇省、蘇州市の霊巌山、霊は霊峰の霊、巌は「いわ」で、

霊巌寺とも言います。この霊巌寺は近代の印光法師、浄土教の祖と言われている印光法師の道場です。もう一つは、江西省の真如寺。これは近代の有名な禅の最高峰と言われている虚雲和尚の禅道場です。

若原: もう一つは、2007年にたくさんの、1000人の僧侶が出家受戒されたようですが、その人達の社会的な階層と言いますか、階級はどういうものでしょうか。それから、あまりに貧しい人を、どう言うんでしょうかね、出家しないように制限するような試験とか、何か制限があるのでしょうか。

李: 戒律を受ける時、今まで試験などは行われていませんでした。今日、私が紹介していたものですが、ついこの前、この発表のために、このお寺のホームページをちょっと覗きました。その時は試験があったのです。これは今年から始まったと思います。1カ月戒期の中に2週間ぐらいで、いろいろ戒律の知識を教えている。それは基本の戒律の知識をマスターしたかどうかという試験をして、それから合格者に比丘戒を授けることができるというものです。中国の仏教では、一人前のお坊さんという印は比丘戒を受けることです。この比丘戒を受けて、戒牒をもらったら、全国のお寺、どこに行っても、今大体一泊二食付きでお寺に泊まることが許されます。比丘でなければ、お寺に泊まることは断られるのです。だから比丘戒を受けるのは、厳しくするのです。しかし、今まで比丘戒を受ける前にそのような試験は無かったと思います。

若原: 制限はないということでよいのでしょうか。その経済的な、豊かとか貧しいとか、そういうのはありますか。

李: それは全然無いですね。ただ、戒律を受ける伝統は、いろいろ制限があるのです。例えば、自分の師匠の紹介書、それからお寺の証明書などがなければ、受戒することはできません。こういう制限はいろいろあるのです。経済的な制限は無いと思います。

若原: わかりました。それでは、林先生へのご質問が若干あります。一つ目は、どうして中台山はそんなにたくさんの信者がいるのだろうかということですが。

林（通訳）: 中台山ですね、どうしてそんなにたくさんの人を惹き付けて、日本円で150億円にもなる豪華な建物を建てることができたのかということですが、中台山が栄えたのは1980年から90年代までです。この時、台湾の経済は最も発展していました。多くの企業家や芸能人、政治家達はたくさんの

お金を稼いで、心の拠り所を求めました。この時、ちょうど禅修を重んじるいくつかの道場が非常に多くの支持を得ました。中台山の惟覚法師はそういう能力に長けておりまして、たくさんの企業家や芸能人、政治家、高級知識人と関係を結んで、たくさんのお金を寄付してもらいました。「新しく本山を建てる」、ということをスローガンにして、人々を惹き付けたのです。たくさんの寄付、太金を振る舞う人がいたということです。他の道場はそのまま寄付されたお金は寺院の建立だけに使うことはなく、別のところに使います。だから、中台山寺は豪華すぎるようです。落成した後、受けた批判は、称賛と同様に多かったとのことです。

林: ありがとうございます。

若原: ありがとうございます。もう一つ、林先生に。台湾にはいわゆる本省人と言うんですか、元々台湾にいらっしゃる人、ずっと以前から台湾にいる方と、大陸から後で来た人、外省人との間に、ある種の対立もあるように聞いておりますが、仏教を支持する方達の中に、そういうものがありますでしょうか。

林（通訳） 1949年に多くの大陸生まれの人が台湾にやって来ました。当然、彼らがちょうど来たばかりの頃はもともと不利な状況にありましたが、重視されました。政治力によって多くのことを変えることができました。日本統治時代は当然、台湾の仏教は日本の仏教宗派に協力することで発展するしかありませんでした。戦後、日本のあらゆる仏教勢力は完全に淘汰されました。当然、台湾の仏教が発展するには中国の仏教と協力しなければいけません。この他、中国から来た僧侶は台湾の僧に比べて、当然、元々の仏教に対する素養というのは深いものがあります。しばらくの発展を経て、台湾の人も徐々に中国の本土の僧達の指導や教化を受け入れました。1960年以後は本土生まれとよそ生まれという区別はほとんど無くなりました。現在の五大道場の勢力から見ると、信徒達の大多数は台湾本土出身です。そして、三人の中国生まれの高僧が支持を得たのは、漢伝仏教の伝統と関係があると思います。

林: 以上、ありがとうございます。

若原: 最後に黄先生のご報告に対する質問が2点あります。一つ目は英語でいただいていますが、日本語でご紹介します。チベットの女性の平均余命、平均寿命は大体何才ぐらいでしょうかということ。例えば、50歳以上まで生きるような女性の比率は何％ぐらいでしょうか。

黄（通訳）： この点はあまり注意していないから、正確なデータはあまりわからないです。2010年の時に中国の人口の調査を実施しております。もし興味があれば、それを調べることができますから、後でお教えします。

若原： それからもう一つ。亜青寺の覚姆達は生涯そこで暮らすのでしょうかというご質問です。

黄（通訳）： この問題は、お寺に出入りが自由かどうかの問題です。今、チベットの仏教は、お寺に入る人も多いけれども、出て行く人も多いです。チベット社会の今の経済発展の状況を見れば、発展しているところは、出家者は非常に少ないです。辺鄙なところ、経済発展の遅れているところ、特に牧地のところは、出家者は多いです。出入り自由だから、出て行く人も多い。その中に活仏も辞めたりする、住職も辞めたりするのも少なくないです。ありがとうございます。

若原： ありがとうございました。そろそろ予定の時間が迫っております。簡単に司会の方から総括をさせていただいて、このセッションを終らせていただきたいと思います。

今日は現地からの、各国からの第一線の研究者の皆さんによりまして、文字通りリアルタイムの生々しいレポートを聴かせていただくことができました。正にこれは私どものこのアジア仏教文化研究センターの構想の一つの柱でございます。こういう企画は今後も当然続けていかなければならないわけですけれども、今回期せずして、改めて中国仏教の多様性というものを私どもが確認する機会となったのではないかと思います。ただ、今回お出でいただきましたのが福建と台湾とチベット、蔵族の地区、言わば中国の周縁であるということですので、この中原の仏教の現状はそれではどうなんだろうか、歴史的にも、伝統的な中国仏教、或いはチベット仏教、それ以外におそらく新興派の仏教というのもおそらく存在するのではないかと想像しますが、そういう中原における中国仏教の現状というものは一つ課題として、今後追求していくべきものではないかという印象を持ちました。

あと2点ほど挙げますと、もう一つは、今日のお話を伺いますと、日本の仏教と、このアジアの諸国の仏教とが共通して抱える課題というものが非常に多いということも改めてわかりました。例えば、社会参加ですとか福祉や教育の面、それから現代的な布教伝道の活動ですね、電子媒体なども伴うような。そういうポジティブな面も共通性がございましたし、林先生のご報告にありましたが、台湾では各仏教教団の間に全く連携が無いとご報告がありました。あまり余所事とは思えない感じがいたしますが、こういうネガティブな面でも共通点があるようです。日本とアジアの諸国の仏教界とは、あまり

連帯というような言葉を軽々しく使いたくはないのですけれども、いろいろ互いに知り合う、実情を知るということで前進することができるのではないかということを感じました。

それからもう一つは、ご質問にもありましたけれども、女性の出家者の問題が、例えば台湾でもチベットでも共通の傾向にあるということ。それから、福建の梵行清信女でしたですかね、そういう、これはかなり伝統があるんだそうですけれども、そういう女性仏教者の在り方。それがいずれも比較的若年層であって、且つ女性特有の社会的な困難や差別から脱出をするということが一つのモチベーションになっている。そういう面でも共通性があるように感じました。これは、いわゆる女性学とかジェンダーの観点からも重要なことだと思いますけれども、特に最近の中東の状況ですね、ジャスミン革命ですか、リビアで何とか言う人が、砂漠の狂犬というのは誰でしたっけ、あれは。カダフィ、彼が捕まりましたけど、その中東の社会変革というのはすでにかなり前から識者によってすでに予見されていたということがこの頃言われているようです。その一つの指標、根拠が、女性の識字率がずっと上昇してきていたということなんだそうです。当然、男性の識字率が最初に上昇するのだそうですが、女性の識字率の上昇というのが、その後の大きな社会変革の一つの指標であるというようなことが報道されているわけです。そうしますと、或いはこれが将来のアジア各地の社会変革の何らかの予兆であるかもしれないという気もいたします。まあ、少し先走った見方かもしれませんけれども。

総括というにはちょっと私的な感想に終始しましたけれど、これで総括に代えさせていただきたいと思います。それでは先生方、本当にありがとうございました。また、コメンテーターの先生方、ありがとうございました。

長谷川： 以上をもちまして、パネルディスカッションの部を終了させていただきます。全てのプログラム、以上で終了いたしました。いただいた質問は各先生のところにお渡ししております。全て網羅することはできませんでしたが、ご了承いただければと思います。